

## 九頭龍川上流の水汲地区のアジメドジョウ

### *Cobitis delicata NIWA*について

武生高等学校 五十嵐 清

1959年より1962年にかけて、筆者は九頭龍川上流域の溪流魚相を明かにすべく、大野郡和泉村及び岐阜県白鳥町石徹白に再三足を運んだ。イワナ、アマゴ、ヤマメなどは、釣人は勿論のこと、一般の人々にもよく知られているが、アジメドジョウは、土地の人は別として、多くの人に殆ど知られていない。まして、この魚がどれ程の価値ある魚であるかは知られていよう筈がない。県下のアジメドジョウについては、丹羽弥博士の報告（1954）の中に簡単に記載されているにすぎない。そこで、筆者は溪流魚相調査のノートからアジメドジョウに関する部分を拾い上げ、一二の所見を報告したい。本調査にあたって御協力を賜った奥越魚業組合長山本清孝氏並びに和泉村大谷の青山茂氏、岐阜県白鳥町石徹白の蟹谷幸助氏に謝意を表する。

九頭龍川は流路116kmにおよび、岐阜県境油坂峠にその源を発し、大小の支流を併せて三国港にそいでいる。九頭龍川は越前平野をへぐくむ母となる川であり、福井、大野、勝山、森田の町々を育てた父なる川でもある。福井平野を流れる九頭龍川はのどかな大きな流れであるが、山あいを流れて来るこの川はまさに九頭龍の名にふさわしい。昔人は増水期のこの川の荒れ狂うさまを唖然として眺めていたことであろう。然し今は違う。本流にも支流にも幾つもダムが造られ計画され、電源開発の川として大きく転換されようとしている。アジメドジョウはこうした時勢に、この川の上流に棲んでいる。やがて来る環境の激変をよそに今日も石あか（珪藻や緑藻）を喰みながら礫石の下に身をひそめているのであろうか。



Fig. 1 アジメドジョウ *Cobitis delicata NIWA.*

(1963・和泉村大谷)

アジメドジョウは和泉村ではアジメと呼んでいて、シマドジョウに大変よく似たドジョウで、シマドジョウと混同されてしまう。我国の魚学の大家である故田中茂穂博士ですら、アジメドジョウはシマドジョウと同一種内のものであってシマドジョウの地万的変異にすぎないとされてい

た。ところが1937年、木曾川の魚類生態研究の権威である丹羽弥博士により、始めて独立の新種として“アジメドジョウ”*Cobitis delicata* NIWAの学名で発表された。最近ルーマニアのT.NALBANT氏は*Niwaella*の新属を設定され学名を*Niwaella delicata* (NIWA) と改められたとのことである。(1965・丹羽氏より)。

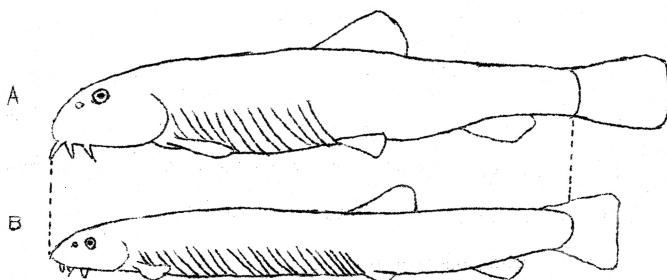


Fig. 2 シマドジョウとアジメドジョウの形態の比較(1)

A. シマドジョウ B. アジメドジョウ (丹羽氏、木曾谷の魚より 1959)

アジメドジョウはシマドジョウと一見よく似ていながら、形態上にも生態上にも明瞭な幾つかの相違点がみられる。先づ口ひげはシマドジョウより太短かく、口唇も肥厚して吸着しやすく発達している。

発鱗が全長の  $\frac{1}{2}$  よりやや後方に位置し、他の鱗と共にシマドジョウのそれより、いづれも小さい。

シマドジョウは浅い清澄な砂礫底を好んで棲息し、その分布も広範囲で、青森以南の本州に殆んど棲息しているが、アジメドジョウは中部、近畿の一部、即岐阜、富山、石川、福井、三重の各県の河川の上流域にのみ分布している

(1954・丹羽)。

県下のアジメドジョウは、私の採集では九頭竜川本流(和泉村一

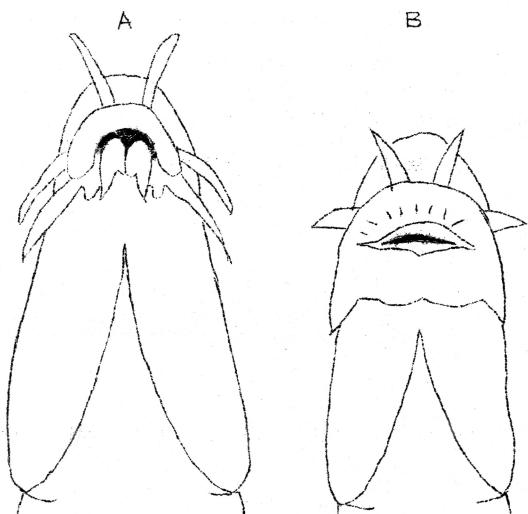


Fig. 3 シマドジョウとアジメドジョウの形態の比較(2)

A. シマドジョウ B. アジメドジョウ  
(丹羽氏、木曾谷の魚より 1959)

帶)、石徹川、真名川、日野川上流(今庄、宇津尾)、に分布していることが解った。最近(1963)丹生高校教諭加藤文男氏が笙の川上流の黒河川において採集していることから嶺南にも分布が広がっているものと推察される。

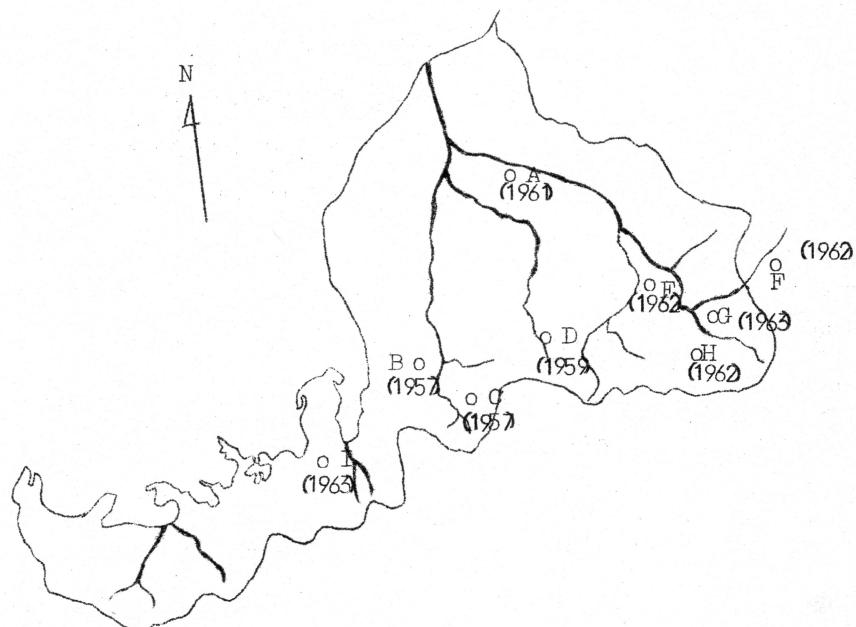


Fig. 4 福井県に於けるアジメドジョウの分布 (1964)

- |                |               |                |               |
|----------------|---------------|----------------|---------------|
| A . 松岡 (1961)  | B . 今庄 (1957) | C . 宇津尾 (1957) | D . 温見 (1959) |
| E . 朝日 (1962)  | F . 石徹 (1962) | G . 大谷 (1963)  | H . 荷暮 (1962) |
| I . 黒河川 (1963) |               |                |               |

筆者は1956年に松岡で採集しているが、個体数も極めて少なく、中流域の例として珍らしい。最適棲息地は和泉村大谷より朝日にいたる一帯で、中でも大谷地区には最も多い。この地区のアジメドジョウは平均全長11センチで、木曾川の全長9センチ内外のものに比べて著しく大きい。又尾鰭に縦縞が5~6条走っているが、これも木曾川の2~3条の縦縞を持つものに比べると著しい特徴を示している。和泉村のアジメドジョウは10月下旬に産卵準備の行動が現われる。即ち河底から湧出する伏流水を求めて続々集り、12月から1月にかけて比較的水温の高いと思われる湧水口(アジメ穴)で産卵すると言われているが、その生態的に詳細な点はまだ解っていない。アジメドジョウは他のドジョウと異り、溪流魚としての一種独特な風味は又格別で、イワナ、アマゴと比べても少しも遜色がない。煮付けて美味しく、オジンにもされて賞味され

る。

県下では奥越を除いてその美味の真価が殆んど知られていないが、岐阜県郡上八幡や白鳥では高級料理として用いられ、朝日大谷のアシメドジョウの大部分がそこに出荷され、その収益も少くないと言われている。

大谷ではアシメドジョウの捕獲に一種のオトシ箱を使っている。アシメオトシと称している。礫石の間に棲んでいるアシメドジョウは餌を求めて移動して来るが、瀬巾の比較的狭いところを見計らってせきを作つておくと、せきを辿つて伝い来たり、やがて用意された箱の中に誘い落し込まれると言つたオトリ箱である。早朝しかけておき夕方引き上げるが、一日で、多いときには15匹(7000匹)余りも入ることである。アシメオトシの中にアカザも可成入るが、ヤマメ、アマゴの幼魚、オイカワなどが迷い込むこともある。アシメオトシの時期は7月頃から始まって11月頃まで続けられその漁期も比較的長い。

今年から始まる電源開発工事で、アシメドジョウの最適棲息地である大谷地区一帯が水没で失(1965)われることは真に惜しい。幸いダムの下流域として残る朝日地区はアシメドジョウの絶好の棲息地であり、可成棲んでいると思われる所以最良の条件のもとで増殖の対策を考えて欲しいものである。ダム完成の後には、ダムの中に取り残されたアシメドジョウがそれぞれどのように適応してゆくか大変興味があるが、果してダムに入り込むそれぞれの河川に棲息場所を求めてどのように移動し繁殖を繰り返すことであろうか。アシメドジョウに寄せる私の夢は果しなく広がつてゆく思ひがする。

#### 参考文献

- 1) 丹羽 弥 : アシメドジョウの地理的分布、生物地理学会、1955
- 2) 丹羽 弥 : 長良川の魚類、1957
- 3) 丹羽 弥 : 木曾谷の魚、木曾教育会、1959
- 4) 青柳 兵司 : 日本列島産淡水魚類総説、大修館、1957
- 5) OKADA Y : Studies the Freshwater Fishes, Bull, Mieprefectural Univ. (1959~1960)
- 6) 五十嵐 清 : 松岡でとれたアシメドジョウとイトヨ、本誌、1962
- 7) 中村 守純 : 原色淡水魚類検索図鑑、北隆館、1962
- 8) 宮地伝三郎 : 原色日本淡水魚類図鑑、保育社、1962